

## 「親ガチャ」雑感

大津 隆文

五月、六月はごどもの日、母の日、父の日と続き、親子関係について意識させられる季節だ。私はなぜか厳父を心掛けていたが、子供はもつと褒めてくれたり、甘やかせてくれる親の方がよかつたろうと思う。今となつては取り返すすべはない。

最近時々親ガチャという言葉を目にする。これは「ガチャガチャ」という子供に人気のある自販機から来ているらしい。「コインを入れレバーを回すと(ガチャガチャと音がして)カプセル入りの玩具等が出てくる。昔のグリコのおまけのようなワクワク感がもちろん当たり外れを選ぶことは出来ない。

子供がどんな親の元に生まれるか、という運不運を表わす言葉としての親ガチャ。言い得て妙と感ずるが、強い抵抗感も覚える。

子供が親の影響を受けるのは確かだ。まずは身体的特性など先天的な影響である。私が運動神経や音楽的センスに欠けているのは親譲りと諦めている。しかし生まれつき完璧な人間は滅多にいないで、子供は千差万別、一長一短、とくに親を恨むことなく過ごすのが普通だ。

次に親の育て方、家庭環境によつて後天的な影響を受ける。近年問題になっているのは、親の貧富、経済力の違いが子供の教育に及ぼす影響。「難関突破 親の経済力次第」「合格歴競争 格差を再生産」、最近の新聞記事の見出しである。

昔の格差は今以上だったが、教育は貧から富へ、地方から中央へと人材を大きく循環させた。明治以来、地方の貧家出身でも高等教育を受け、天下で活躍した実例は数多くあった。「先人は蛍の光窓の雪で勉強した」とか「艱難汝を玉にす」という気概も持てた。

今や貧しい家庭に生まれた子供は前途に絶望感しかないのだろうか。子供の貧困率(所得が平均の半分以下の家庭)は十三・五%、七人に一人だ。家族の介護や世話をしているヤングケアラー、わが子を虐待する鬼のような親等々、救いはないのか。

希望は「ごども家庭庁」の発足だ。大いに機能を発揮し、親ガチャという言葉を早く死語にしてほしい。